

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32816

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K03242

研究課題名（和文）芸術創作プロセスにおけるずらしと省察の関係からみる創造的な熟達過程の解明

研究課題名（英文）Process modification and reflection in an artistic creative process and a development of expertise

研究代表者

横地 早和子（Yokochi, Sawako）

東京未来大学・こども心理学部・准教授

研究者番号：60534097

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、芸術家の創造的な熟達過程の一端をとらえることを目的に実施された。コロナ禍の影響により当初の計画を大幅に変更せざるを得ず、実施にも遅れが生じたものの、現代アーティストを対象に新たなアイデアに基づく作品制作過程の観察をおこない、創作の意図やテーマについてインタビューを実施した。また、「芸術創作プロセスのずらし」と「省察」の関係性を検討するための現場実験を実施した。得られたデータに基づき、芸術家の創造過程と、そこで生じる省察の種類などを分析し、創造的な熟達過程においてどのような機能を果たしている可能性があるのか解明を進める予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

芸術家を研究対象とすることは、時代の変化の最先端において彼らがどのように変化に対応し、高い創造性を維持し、新たな作品という価値を創造できるのかについて解明することである。それはすなわち、専門領域に習熟しているが故に創造性が低下するといったような、熟達と創造のトレードオフの問題について、芸術家がどのように対処しているのかを解明することに貢献する。加えて、プロフェッショナルの創造過程や創造的な熟達過程の解明は、専門教育への応用に留まらず、急激なスピードで変化し多様化する社会的価値に対応して、柔軟な発想で新たな価値を創造する21世紀型の人材育成を目指す教育現場への応用も期待される。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to investigate the development of creative expertise. I conducted field studies based on observing their processes of creating artworks with new ideas and interviewing the contemporary artists regarding their intentions and themes of creation. In addition, I conducted a field experiment to capture the relationship between 'process modification' and 'reflection'. Based on the data, in terms of the relation between the artists' creative process and the types of reflection, it is planned to analyze and clarify what functions they may be fulfilling in the developing the process of creative expertise.

研究分野：心理学

キーワード：創造性 芸術創作 創造的認知 ずらし 省察

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、人工知能の飛躍的な発展が進む中、人間の創造性に改めて注目が集まっている。近年の教育の潮流が、STEM教育 (Science, Technology, Engineering, Mathematics) から、芸術 Art を加えた STEAM 教育に移行しつつあるのもその一つの現れである。

創造といえば、パズルのように馴染みのないもの同士や概念上距離の遠いもの同士を組み合わせること等が典型的な活動だとみなされてきた。ところが、芸術の歴史を紐解くと、こうした単純な組合せで芸術的な創造がなされているのではなく、新たな芸術領域の生成や価値観・概念の変化をもたらす背景には、「何かの要素をベース」に「別の要素をずらす」活動が行われており、科学的発見に貢献するとされる類推よりも、ベースの積極的なずらしが関与していると指摘されている (Okada et al., 2009)。また、ずらしのタイプによって創作活動の省察が異なる形で生じること (例えば、方法は同じでもモチーフをずらして新たな作品を作ると方法の捉え直し (省察) が促される等) や、ずらしが長年の創作経験で培った創作ビジョン (表現の中核的なテーマ) と結びつくことで、多彩なアイデアが生成されることも分かってきた (横地・岡田, 2007; 横地・岡田, 2018; Yokochi & Okada, 2018)。

このように、ずらしによる認知操作は、継続的な創作のアイデアの生成を可能にすると同時に、ずらしのタイプに応じた異なる省察 (Schon, 1983) も促すと予想されることから、ずらしと省察の関係性に着目した研究を行うこととした。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、創造的思考において重要な役割を果たす認知操作である「芸術創作プロセスのずらし」と、創作活動の経験や知識を構造化する「創造活動に対する具体的な省察」の関係から、創造的な熟達過程を解明することである。具体的には、熟達段階の異なる芸術家を対象に、芸術的創造活動におけるずらしとずらしの結果に対する省察の内容を検討することである。

ただし、2020年からはじめた新型コロナウイルス肺炎の感染対策のために、当初予定していた研究を進めることが困難となり、研究目的の達成は限定的なものとなった。

### 3. 研究の方法

#### (1) 予備観察

コロナ禍によって実験計画の見直しの必要性が生じたため、実現可能な実験を検討するための予備現場観察を実施した。現代アーティストに個別に協力を依頼し、許可が得られた対象者に対して、自発的に、アーティスト本人が新たな試みとして、今までの制作方法とは異なる方法で作品を制作する機会に限定して、その制作の準備過程と制作過程を複数回にわたって観察した。

別々の対象者に対して、オンラインによる観察と、対面による観察の両方を試みた。やはり、オンラインの観察では、画角からアーティストが外れてしまったり、道具や素材の扱い方の様子が分からないなど、様々な問題があることが分かった。そのため、オンラインでの実験は断念せざるを得ず、対面での実験を計画することとなった。

#### (2) 制作実験

予備観察の内容を踏まえて、年代の異なる現代アーティストを対象に、作品制作の個別実験を実施した。実験では、日常生活で普段から目にする何気ない素材を多種類集め、一定の制約の下で作品を連続して制作してもらった。制作の様子はビデオで録画し、制作中の思考を捉えるために発話思考法を取り入れるなどして、制作プロセスのデータを収集した。また、実験後は制作した作品についての振り返りや、制作中に思いついたアイデアの出所などについて質問し、各作品に対する省察を行ってもらい、それについてもデータとして収集した。

後日、制作実験での取り組みが、どの程度普段の制作と類似性があるのかなどについて聞き取り調査を実施した。普段の制作と異なる環境で行われた制作との間のズレがどの程度のものであり、それが実験で制作した作品にどのような違いとして現れているのかを検討するための参考資料としてインタビューを行った。

なお、コロナ禍であった事が原因して、十分な数の研究参加者を募ることが難しかった。今後もし引き続き参加者を募るなどして、データを収集したいと考えている。

### 4. 研究成果

#### (1) 予備観察

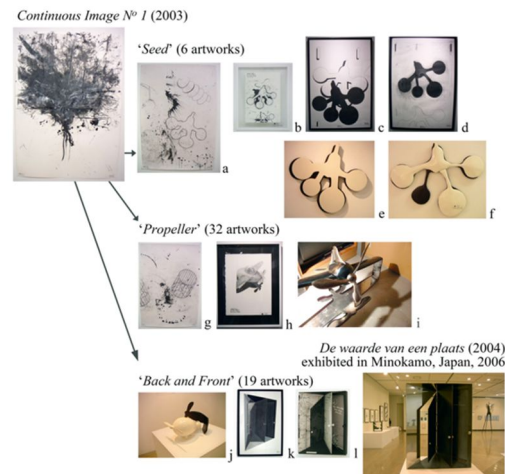
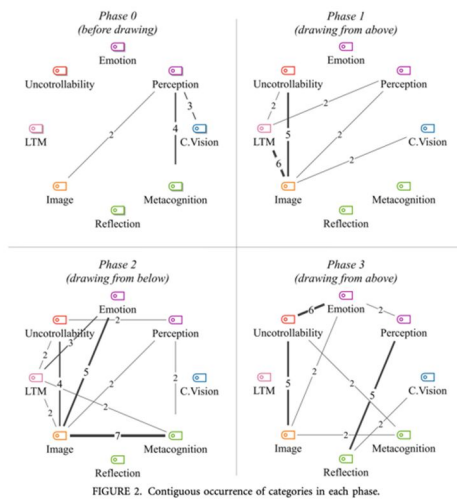
協力者である現代アーティストが、いつもとは異なる方法や今まで取り組んだことのない素材などで制作を行う場合に限定し、現場を観察させてもらった。これは、「ずらし」をアーティスト本人が意図的に起こして制作しようと試みる状況に該当する。この予備観察の対象者は少数であり、ずらしと省察の関係を捉えるための実験の見直しのための資料収集という位置づけで行われた。ここでは、参考になった側面について簡単に報告する。例えば、新しい方法や素材を取り入れる動機には、そもそも、アーティスト自身が、これまでの作品制作はある程度の収束を迎えていると感じている必要があった。新たなテーマや作品の展開を探したいと考えている

中で新たな方法や素材をためしてみようという自覚がなければならず、そのような準備状態にない場合は、ずらしを行うことの影響はあまり大きくないことが予想された。

一方、かなり昔から温めていたアイデアである場合もあった。アイデア自体はずいぶん前に考えていたものの、実行に移すチャンスがなかったというものである。今回、そのアイデアの実現に必要な複数の条件が整ったため、制作を試みることとなった。その一番大きな制約は、アーティスト自身が使いたいと考えていた素材を準備できないということにあった。素材自体、どこにも存在しないものであり、別の専門家に素材自体を作ってもらった必要があった。ただし、素材そのものに意味があるのではなく、それを使って制作をすることで何を感じるのか、どのような発見があるのか、といったことを体感したいという意図が中心となっていた。どうやら、これまでの制作方法や用いる素材を変更したり、制作のテーマを変えることは、アーティスト本人にとっての必然性に基づいていることが肝要のようであった。

こうしたことを踏まえて、過去に、共同研究者とともに実施した、上記と類似の動機に基づいて実施された作品制作場面のデータ分析が有効であると判断した。このデータは、学会発表などで紹介はしていたものの、論文としての発表は行っていなかった。今回新たにこのデータを分析し直し、論文として発表することになった (Okada & Yokochi, 2024)。

Okada & Yokochi (2024) は、現代アーティスト本人がこれまで試したことがない方法、具体的には「上向きに絵を描く」という本人のアイデアに基づいた作品制作の観察データを分析したものである。分析の結果、新たな試みにより今まで感じたことがなかった感覚、つまり「自分で自分の行為がコントロールできない感覚」(同論文内では“uncontrollability”と呼んだ)が生じたこと、また、その他の様々な感覚や感情、記憶などが影響し合うことで新しいイメージが生まれること、また体験した感覚や、制作後、その絵を繰り返し見ながら思い浮かんだイメージや発想に基づいて、複数の新しい作品のテーマを生成し、多数の作品群(シリーズ)を作り出していったことが分かった(以下の図は論文からの抜粋である)。



このような分析結果を踏まえて、ずらしを行うことで多様な感覚や感情、記憶の想起などが生じ、新たなイメージが生成され、アーティストにとって新たな展開がもたらされることが示された。同様の現象が生まれるような実験を計画すると共に、Okada & Yokochi (2024) では捉えきれなかった省察にまつわるデータを収集できるように準備を行った。

## (2) 制作実験

制作実験で得たデータは、制作プロセスの分析とともに、制作された作品群について創造性の側面や発想の展開の側面からの評価を進める予定である。現時点のデータは、十分なサンプルサイズではなく、判断材料に乏しいため今後も随時実験を実施してデータ収集を行う必要がある。ただし、幾つか共通してみられる特徴(例えば、ずらしの方向性、手が止まるポイント、自己評価の観点など)には、心理学的にみても興味深い内容が含まれているため、この方法を用いた研究を継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 横地 早和子	4. 巻 29
2. 論文標題 アーティストと私たちの創造的自己信念	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 285-288
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2022.008	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yokochi Sawako, Okada Takeshi	4. 巻 55
2. 論文標題 The Process of Art making and Creative Expertise: An Analysis of Artists' Process Modification	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 The Journal of Creative Behavior	6. 最初と最後の頁 532-545
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/jocb.472	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Okada Takeshi, Yokochi Sawako	4. 巻 -
2. 論文標題 Process Modification and Uncontrollability in an Expert Contemporary Artist's Creative Processes	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 The Journal of Creative Behavior	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/jocb.635	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Yokochi Sawako, Okada Takeshi
2. 発表標題 Exploration and reflection in emerging artists' art making
3. 学会等名 MIC (Marconi Institute for Creativity) Conference 2020 (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Yokochi, S., & Okada, T.
2. 発表標題 The process of art-making: An analysis of artist's modification of conditions in the art-making process.
3. 学会等名 The 41th Annual Conference of the Cognitive Science Society (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yokochi, S.
2. 発表標題 Case Study of Art Creation: The Roles of Case Studies in Creativity Research.
3. 学会等名 International Society for the Study of Creativity and Innovation (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本認知科学会、横地 早和子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 224
3. 書名 創造するエキスパートたち	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関